佐賀県
http://www.pref.saga.lg.jp/

佐賀県
景観情報誌
vol.4

美しき さが

［特集］
白石町縫ノ池

［縫ノ池］
池に囲われた鎮守の森の美しい風景は、「22世紀に残す佐賀県遺産」にも認定されている。

まちの常色、非常色
――美しいまち並みをつくる色使いの作法を考える

環境色彩計画の専門家である吉田慎悟先生から、昨年11月に多久市で開催した「景観シンポジウム」において、色彩の観点からまちづくりへのヒントをいただきました。あなたも地域の色について考えてみませんか。

○日本のまちの非常色

幹線道路沿いというのは日本中どこも同じような景色になっています。それぞれの商業者が、自分のところに目を引き付けたいために色の鮮やかさを競っていますが、ルールを作らないと、環境の中の色は相当混乱し「非常色」な状態になっているのです。

ある地域で熱心な議員さんがいて、うちは桜が有名だから、歩道橋を桜色にしようと頑んだということでした。それは、パッケージやファッションなどの商品色彩計画の手法であって、まちを構成する大きい施設などにそういうイメージカラーを使うと、大体失敗します。

僕たちは騒音に対応して、「騒色」という言い方をしているのですが、騒音の方はこれ以上大きくしないでくれという表示ができてきましたが、色に関してはまだ行われていませんでした。近年、景観法等ができ、地域の景観をよくしようということで、建物の色の基準をつくるところもでてきました。

○まちの色彩はまちの皮膚

色彩計画というと、まちのお化粧計画みたいに言われることがあります。しかし、まちの色とは、まちの皮膚だと思っています。まちの生業や活動が全部出てくるものです。ですから、その地域の生活がしっかりしていないことには、きれいな色はないと思っています。

自然の中では、花や蝶々や鳥など、小さくて生きている動的なものの中に鮮やかな色があると言われます。緑や空は中間的な鮮やかさを持っており、それからもっと大きな、大地や岩山等の地表にある不動のものは穏やかな色彩です。まちの色彩は、自然界の色使いに学ぶことが重要です。

○西洋の色の使い方、日本の色の使い方

僕も昔は西洋の色使いがきれいだと思ったのですが、日本にもそれに匹敵する色の世界があります。色彩を取り出し体系化して、配色論を作ったのが西洋で、日本は材質と一緒に陰影や質感をトータルで見る。だから、西洋のものを日本に持ってきても根付かないと思うのです。景色は、その土地の気候風土の中で、試行錯誤してつくられてきたもので、色もそこで選ばれてきました。昔は、木とか土とか石とか、地域の自然材を使ってまちは全部できていた。この気候風土がつくった自然の色が、そのままたちあがって、まちができていたということですよね。だからそこの緑とか花とか、あるいは昆虫とか、調和するのが当たり前です。そういう昆虫や花の色を引き出して、カラーイメージとして膨張させて、建物などの色にしてしまうからおかしくなるのだと思います。

○市民との協働によるまちづくり

最近、色彩のアドバイスを行う時に、市民と一緒にやりましょうと提案します。以前、公園の遊具の色をみんなで塗ろうと提案したとき、自然の色を用いようということで、塗り替える色は自然の葉っぱの色を基本にしました。3つのチームで案をつくり、決定した案の色に塗り替えました。指定管理者も最初は面倒くさがっていたのですが、塗り替えてみるとまちの人たちが注目してくれて、実際にきれいになりました。終わった後に、これからは公園の遊具の色はみんなワークショップで決めようということを提案してくれて、今年は最初に参加した人たちを先生にして整備をしています。

色彩計画とは、基準を作って守ればいいのではなくて、活動だと思うのです。自分たちのまちの生業や活動に目を向けて、それをよくしていこうと努力していくことなのですね。それが実っていくと、楽しくなってまちの色が皮膚になっていくのだと思います。

○まちの色の考え方

色に良い色、悪い色というのはないと思います。色は、それぞれのものとか、形とか、地域とか、それらとの関係性が整ったときに美しく見える。それから、環境の色彩にとって地域性は大事です。地域で長い時間かけて作られてきた色をベースにすべきだと思います。「色っていうのは自由で、個々人勝手なものでしょ」と言う人がいますが、建物の外側に塗る色は、社会性を持っていると思います。だからみんなで話し合いながら決めていくルールが必要だと思います。

吉田　慎悟 先生
色彩計画家、武蔵野美術大学教授
佐賀県美しい景観づくりアドバイザー

川崎都心アーバンデザイン色彩基本計画、兵庫県景観条例色彩指導基準作成、熊本県景観形成色彩ガイドライン作成、幕張新都心住宅地公園東のまち1～4番街色彩設計、中国大同市の環境色彩基準策定など、数多くの環境色彩計画を手掛けている。

Information

◆佐賀県遺産を認定しました

佐賀県遺産とは、地域の宝というべき「景観が美しい地区」や「地域のシンボルとなっている建造物」です。平成22年度には、新たに7件を佐賀県遺産に認定しました。

○縫ノ池
（白石町湯崎）

○多久市西渓公園
寒鶯亭
（多久市多久町）

○佐賀市歴史民俗館
旧福田家
（佐賀市松原）

○佐賀市歴史民俗館
旧古賀銀行
（佐賀市柳町）

○佐賀市歴史民俗館
旧古賀家
（佐賀市柳町）

○佐賀市歴史民俗館
旧三省銀行
（佐賀市柳町）

○佐賀市歴史民俗館
旧牛島家
（佐賀市柳町）

美しき さが　佐賀県景観情報誌 vol.4
平成23年3月発行

発行／佐賀県 県土づくり本部 まちづくり推進課　景観担当
〒840-8570　佐賀市城内1丁目1番59号（県庁新行政棟8階）
TEL0952-25-7326　FAX0952-25-7314
machidukuri@pref.saga.lg.jp　美しきさが　検索

佐賀県
http://www.pref.saga.lg.jp/

【特集】白石町縫ノ池（ぬいのいけ）

四季折々の姿を見せる神秘の池 40年ぶりの湧水の復活を機に地域の全員で守っていく

神社の木立を映し込み、神秘的な景観となる縫ノ池。一度は枯れてしまった湧き水が40年ぶりに戻って来たとき、地域の人たちは全員で環境保全に取り組むことを決めました。

白石平野の季節を映し出す神秘の池

のどかな山園風景が広がる白石平野を西に進むと、「日本三大歌垣」にも数えられる杵島山の麓に、川津地区があります。2本のメタセコイヤの木が平野からまるで天に届けとばかりに伸び、その足元には約800年以上も前から地域の人たちに大切にされてきた厳島神社（いつくしまじんじゃ）と縫ノ池があります。

縫ノ池の澄み切った水面には厳島神社の木々が映り、中央のメタセコイヤを中心に左右対称、水面を境に上下対象と、何とも不思議な光景が目を引きます。「風が凪いだ日はどちらが水面かわからない」ともいわれ、その神秘的な姿を収めようと県内外からカメラマンが訪れることも多いのだそうです。

しかし、その縫ノ池は平成13年に湧水が復活するまでの40年もの間、干上がった状態で、美しい景観は長い間目にすることは出来ませんでした。

湧水の復活で子どもからお年寄りまで集う場ができた

白石平野では、昭和30年代の前半から、かんがい用水や飲料水のほとんどを地下水に依存し、地下水の過剰な汲み上げを行いました。その結果、縫ノ池の湧水は一度、枯れてしまったのです。転機が訪れたのは平成13年の4月。飲料水を地下水から表流水に変更した直後から、厳島神社の周辺では湧き水が出始め、縫ノ池の美しい景観が戻ってきたのです。湧水の復活は川津地区の人たちの大きな喜びとなり、子ども時代に池で遊んでいた年配の方にとっては昔を取り戻したような懐かしさとなりました。そして、平成14年に、縫ノ池を「地域の人たちの憩いの場・交流の場」にして地域活性化や自然環境の保全活動を行おうと、「縫ノ池湧水会」が発足しました。

縫ノ池の前で昔の思い出話を語る、縫ノ池湧水会の赤坂宗昭さん、栗山重義さん、栗山和久さん（左から）

地域ぐるみの活動が全国的にも話題に

会は区長兼会長の栗山和久さんを筆頭に、子どもからお年寄りまで60世帯、総勢260名。地域の人たち全員が会員です。毎年、夏と秋には会員やボランティアスタッフの協力のもと、池内や池周辺の清掃作業を行うほか、地域の子どもたちを集めての釣り大会や、湧水を使ったお茶会の開催、縫ノ池の歴史に由来のある放生池の復活イベントなどを行っています。また7月15日の厳島神社の夏祭りの際には、池の周囲や境内に約800個のキャンドルを並べて灯し、水面に映る美しさをきっかけに水環境やエコを考えるキャンドルナイトも開催。そのほかにも、縫ノ池の自然環境や景観を守るために、池に生活排水を入れないことや、池や川津地区では除草剤を使用しないという取り決めとなっています。

こうした地域ぐるみの環境活動は、全国的にも注目され、平成15年には全国「川の日」ワークショップの発表でグランプリに選ばれたのをはじめ、平成21年には「にほんの里100選」に選定され、また平成22年には佐賀県で13年ぶりとなる国土交通省の「手づくり郷土賞」など数々の顕彰を受けられています。

また、湧水は飲料水水質基準の検査の結果、飲料水として使用できることが分かりました。今では「料理やお茶に湧水を用いるとおいしい」と地域の人はもちろん、町内外からも湧き水を汲みに来る人が絶えません。「私たち住民は生活のために地下水を過剰に汲み上げ、一度は縫ノ池を干上がらせてしまいました。でも、人の手で壊した自然も、元に戻そうと努力すれば応えてくれるということです」という区長の栗山さんの言葉通り、縫ノ池の澄んだ水面には、地域の宝を後世に引き継いでいく、地元の人たちのたゆまぬ努力が映し込まれているようです。

※放生を戒めるために捕らえた魚などを解放する場所

子どもたちが集まる釣り大会
釣り上げた魚は観察したあと池に戻す

【私たちの景観づくり】

炭鉱町の歴史を伝える煉瓦館 未来へ繋がるコミュニティの場へ

（大町町）杵島炭鉱変電所跡活用推進会　代表　大西奈々美さん

住宅街の中に忽然と現れる赤煉瓦造りの大町煉瓦館。風雪に耐えた趣のある外観で、随所に残された碍子（がいし）の跡が、変電所の名残りだと伝える。中では大町煉瓦館の活動の様子などを展示。

大町煉瓦館
杵島郡大町町大字福母 2673-4
TEL 050-1255-3549
開館時間　9～17 時頃（不定休）
入館無料

大町町は、かつて県内一の出炭高を誇った「杵島炭鉱」の拠点として、とても栄えた町でした。この「大町煉瓦館」は炭鉱施設に電力を送る変電所として昭和2年に建設され、活用されていた建物。昭和44年の閉山以降、炭鉱関連の施設は次々と姿を消していき、今やこの変電所跡である煉瓦館のみが当時の面影を残す建造物として残っています。建物は建設から80年余りが経ち老朽化も進んでいましたが、私たちの父や母、町の先輩たちの人生を物語る貴重な「生き証人」。平成17年に、「NPOまちづくり研究所」のサポートを受け、町内の有志からなる「杵島炭鉱変電所跡活用推進会」が発足しました。

この建物を修復保存して活用するにあたり、私たちがテーマに掲げたのが「過去」と「未来」です。炭鉱町として栄えた歴史を受け継ぎ、その財産を未来ある子どもたちに届ける「場」にしたいと思いました。まずは10m以上の吹き抜け天井から生まれる、抜群の音響を活かした碗琴のコンサートを皮切りに、著名なアーティストと子どものワークショップ、さつま芋の苗植えや収穫体験などさまざまなイベントを企画。ときには当時炭鉱で働いていたというお年寄りも来館され、即興の歴史講座が開かれることもあります。これからも地域のコミュニティスペースとして、町の活性化のために有効に活用していきたいと思います。

煉瓦館はコンサートホールからギャラリー、ワークショップなどの幅広い活用の場

杵島炭鉱変電所跡活用推進会　代表
大西奈々美さん

古民家を活かす

香月家（らくや）×楽家

嬉野市

江戸期に長崎街道の宿場町として、また塩田川の水運を利用した川港として栄えた嬉野市塩田町。かつての隆盛を伝える威風堂々とした白漆喰の町家が多く残るこの地区は、国の重要伝統的建造物群保存地区にも選ばれ、県内外から多くの観光客が訪れています。

その旅人の憩いの場となっているのが、金・土・日曜日のみ暖簾をあげる食事処「楽家」です。楽家は豪商の家屋を復元、利用しており、歴史を感じさせる建物と店主の香月いわえさんが趣味で集めた骨董の調度品がよく調和しています。また香月さんが生けた花が醸し出す凛とした空気も心地よく感じます。

食事は地元の畜産家が育てた上質の牛肉を主役に、自家農園で採れた野菜などを使った心づくしの家庭料理です。香月さんが介護の仕事もしていた経験から食の大切さを痛感し、食材から調味料まで体にいいものを選んだという料理を食べると、身も心も健やかになりそうです。

楽家（らくや）
嬉野市塩田町上町 1461
電話　0954-66-5635
営業日　金曜～日曜（祝日は不定休）
営業時間　12:00～21:00 ごろ（ランチは 15:00 まで）

※ランチはお一人様 1,500 円
夜の食事は要相談
交通アクセス　嬉野市役所本庁から佐賀銀行塩田支店の方へ進み、左手

私の好きな景観

南城内の築地塀（ついじべい）

唐津市南城内

「静かな、そして時代を感じる空間」、この通りを歩くと、何かしら落ち着きを感じるのは、人間も自然の一部であることの証なのか。

喧騒の街なかで、静寂の空間を演出する自然素材の造形は、人の心を和ませる。

この築地塀は、明治中期に、この屋敷の持ち主である竹内（たけのうち）太郎（たろう）が築造し、この屋敷に 36 年間住んだ。

彼は、唐津炭田の芳谷炭鉱を経営し、また小松製作所（現コマツ）、唐津鉄工所、日産自動車の前身である快進社の創設者であり、政治家吉田茂の長兄でもある。

築造時は、漆喰（しっくい）塗りの築地塀であったと思われる。数年前までは、漆喰片がほんの少し、見られたが、現在はない。

築造時の漆喰がはがれて、外界を遮断する威厳を持った空間から、人々を迎える「土塀」に生まれ変わった。

以来、素朴な親しみの表情を持ち続け、より優しく、この地に融けこみ、人々の心をひきつけて来た。

この、土が創りだす風情は、唐津市民の心に、原風景として住み着いている。

（一級建築士　大浦洪二）